

ダウン症児に対する動作法の援助 —イメージの導入における効果と課題—

Implementation of Dohsa-Hou for a child with Down syndrome - Effects and challenges of using images -

藤野 正和

I. 目的

ダウン症児は、姿勢・運動における発達の遅滞・劣弱が顕著であることが知られており、また精神発達遅滞を伴うケースも少なくない（安藤，1990；橋本・菅野・細川・小島・菅野・池田，1999；池田・岡崎・中村，1980）。これまでダウン症児に対する教育的な支援は「ワシントン大学プログラム」をはじめ、「オレゴン大学プログラム」、「ボーテージ・プログラム」「感覚統合」「感覚運動学習」「ムーブメント教育」などさまざまな方面からなされてきた（田中，2002）。一方で、心理・教育的な支援の方法として、動作法の有効性が指摘されている。動作法とは、「動作を通して動作者のところに働きかける心理学的方法」（成瀬，1992a）であり、特に障害児に対する動作法については、「動作を通して障害児と関わり、障害児の心の活動のあり方に働きかけ、その働きかけに適切に対応ができるように援助する方法」（2002，針塚）である。つまり、障害児は生活する上で何らかの不適切な動作や行動で表現してしまったり、または可能性のある能力を十分に発揮できない状態にあると考えられるので、適切な動作や行動を表出したり、これまで発揮されなかった能力を活性化し、これまでと異なる新しい経験ができるような働きかけを動作を通して行うことである。ダウン症児における動作法の効果については、動作や運動発達が促進されるだけでなく、ことばの構音や吃音の改善、情緒や社会面における落ち着きのなさや頑固さが改善するなど様々な面での効果が示唆されている（菊池・田中，2000；田中，2002）。これらの効果は、動作課題を通して援助者とのコミュニケーション過程の中で培われ、その過程の中で起こる多様な体験によって促されたと考えられる。動作課題を通したやりとりでは、子どもが援助者から提供された課題を受けとめその課題を取り組みながら、援助者の要請や意図に気づき、それを受け入れて自分の課題として援助者と共に動作課題を遂行することによって、課題が援助者と子どもとの共通した課題（共通課題化）に至ることが示唆されている（針塚，2002）。この共通課題化においては、他者対峙的活動や自己対峙的活動が求められるが、年少のこどもや知的に遅れを伴うような被援助者にとっては困難場合もあり、この共通課題化に至るまでの過程には援助者の創意工夫が求められる。これまでの動作法の研究においては、このような共通課題化までの援助者の援助プロセスについて詳細に扱った研究も見られるが、今後も知見の蓄積が求められるところである。

そこで本研究では、知的な遅れを伴うダウン症児の事例を通して、この共通課題化に至るプロセスにおける援助者の工夫として、イメージの導入を用いることの効果について検討することを目的とする。

II. 事例の概要

1. 対象児：特別支援学校中学部1年生の男児（以下、トレーニー）
2. 診断名：ダウン症候群（標準型）
3. トレーニーの状態像

療育手帳はB1、身体障害者手帳は5級であった。今年度より特別支援学校中学部に入学し、現在のところ学校での生活においては適応的に過ごすことができている。しかし、トレーニーの特徴として、新奇場面に対する不安の高さが見られ、そのような場面では活動を行うことに難色を示すことが多く、新しいことや物事が

変更するに対する苦手さが見られる。また、運動面については、自立歩行はできるものの、ちょっとした段差で躓いてしまったり、走るなどの動作の際に不必要な緊張が見られたりする様子が窺われた。ことばの面については、他者との言語的なやりとりは行えるものの吃音を有しており、時折聞き取りづらい様子が見られ、他者のやりとりに齟齬が起きてしまうことがあった。

4. 日常の療育とこれまでの経緯

療育は、生後半年から耳鼻科にて言語聴覚療法、1歳から理学療法、2歳過ぎから作業療法を月1回程度継続的に受けている。動作法については、1歳より訓練会・心理リハビリテーションキャンプに参加している。

5. キャンプにおけるニーズ

保護者の願いとしては、「集中力が続くようになって欲しい」「足を踏みしめるときの影響か、巻き爪になっているので、足の踏みしめ方を良くすることで改善したい」とのこと。トレーニーに今回のキャンプで頑張りたいことについて確認するも、顔を伏せ、返答が見られなかった。

6. 援助期間と援助形態

(1) 援助期間

X年8月に行われた5泊6日の心理リハビリテーションキャンプである。

(2) 援助形態

心理リハビリテーションキャンプでは、動作法、集団療法、トレーナー研修（ミーティング）、親の会などが行われる。動作法については、原則1回につき50分で行い、1日3回実施された。また、動作法の場面では、援助者をトレーナーといい、被援助者をトレーニーという。また、トレーナーの動作援助・かかわりに対する指導・助言を行う立場をスーパーヴァイザーという。筆者はスーパーヴァイザーとしてトレーニーにかかわり、トレーニーに対する直接的な援助はトレーナーが中心に行った。

7. インテーク時の見立てと方針

(1) 見立て

坐位においては、骨盤が後傾し、腰が反り、背中の中間あたりから肩甲骨にかけて丸みが見られ、肩が内側に入っている。肩甲骨の慢性緊張に伴い、あごが突き出て、首が若干反らせている。重心は右重心であり、左に重心を乗せることは可能。膝立ち・立位では、股関節が後方に引け、腰の反り、背中の中間あたりから丸みが見られ、坐位での特徴がより顕著になる。また、片膝立ちでは、上体の特徴は同様に見られ、また左軸足では重心移動の際、右出し足に重心を移行できるものの、股関節が引き気味になってしまい、右出し足の踏みしめは内踏みになってしまう。さらに、右軸足では重心移動の際、左出し足への重心移行が難しく、また股関節が引き気味になり、左出し足は外旋してしまい、外踏みになってしまう。

動作以外の部分については、トレーナーとは初めてペアになったということもあり、戸惑い・不安も見られ、質問に対する返答は乏しく、時折頷きなどで返答する。また、苦手な課題（片膝立ちなど）にはあまり取り組むことができず、お尻についてすぐにやめてしまう様子が見られた。

(2) 方針

- ①肩・肩甲骨まわり、腰周りに見られる慢性緊張を弛める。
- ②膝立ち・立位姿勢の中で腰を入れ、タテの力を入れて、姿勢を保持する。
- ③左右の重心移動の際、適切な力を入れて、足裏全体で踏みしめる。
- ④他者対峙的活動や自己対峙的活動を通して、それらに伴う体験を活性化させる。

(3) 動作課題

リラクセーション課題

タテ系動作課題

① 軀幹部のひねり

① 膝立ちでの腰出し入れ

② 腰のひねり

② 片膝立ちでの姿勢保持と重心移動

③ 背反らせ

③ 片足立ちでの姿勢保持

8. 倫理的配慮

今回の研究にあたり、トレーナーとトレーニー・保護者に対して、「個人が特定されないように配慮すること」「今回のデータは今後の障害児・者に対する心理・教育的な支援の発展のためにのみ使用すること」などを含む研究協力依頼について口頭・紙面にて説明を行い、事前に同意が得た。

Ⅲ. 事例の経過

(1) 1 日目

トレーナーは、インテーク時に与えられた動作課題をもとに訓練を進めていった。特にこの日は、背中周り、腰周りの緊張を弛めるリラクセーション課題と片膝立ちでの姿勢保持を中心に行った。トレーニーはトレーナーが提示するリラクセーション課題などの動作課題に応じるものの、課題中手遊びをしたり、小さな声で歌を歌ったりなど課題を意識して取り組むことが難しい様子が見られた。そのため、トレーナーから「少し楽になった？」という質問に対して、どこか気のない返事で答える様子が見られていた。また、片膝立ちの姿勢保持課題では、課題姿勢をとることはできても、すぐに姿勢が崩れてしまう様子が見られ、トレーナーの援助の行い方の影響もあるかもしれないが、トレーニー自身何を意識すればいいのか不明確な印象を抱えている様子が見られた。そこで、スーパーヴァイザーが介入し、トレーニーへの援助の際のポイントとトレーニーと特徴をトレーナーともう一度確認した。トレーナーの1日目の所感として、「お互い遠慮があり、トレーニーも様子を見ているように感じがした」と語りがあったように、動作課題は行っているものの、課題を一緒に取り組んでいるというような印象は抱きにくかった。1日目のミーティングでは、トレーナーの意識が動作課題を行うこと自体に強く意識が向いている印象を受けたので、動作課題の中でトレーニーがトレーナーや課題にどう向き合い、どのような体験をしているのかについても意識するように助言した。

(2) 2 日目

トレーナーは昨日のミーティングでの助言を受けて、動作課題の中でトレーニーの体験をより意識して捉えるように心掛けながら関わろうとする様子が見られた。例えば、トレーナーがトレーニーに直接触れる場面を増やしたり、トレーニーが頑張りたいこと、やりたいことを尋ねて目標を共有しようとしたりと、工夫しながら働きかけていた。しかし、トレーニーはその問いに対してうまく応えることができず、トレーナーの「○○できたらいいよね」「○○したいよね」という言葉に対して頷くのみであった。3回目の動作法の際に、スーパーヴァイザーからトレーニーに対して「最近は何が好きなの？」と尋ねたところ、自分の好きなプロ野球の球団を答えた。そこから少しずつトレーニーの話を聞きながら内容を膨らませていき、ある程度イメージが賦活されたところで、スーパーヴァイザーから「じゃあ、○○選手の真似してごらん」というと、その選手になりきったように真似をする。しかし、その姿勢はトレーニーの姿勢特徴が顕著に現れており、その姿勢の特徴をトレーニーに指摘すると、トレーニーは指摘を受けた身体部位を意識して動かそうとするが難しく、試行錯誤している様子が見られた。その後、スーパーヴァイザーが直接援助を行いながら、身体への意識を促すと、トレーニーも主体的に課題に取り組む様子が見られた。そこで、その流れをトレーナーに引き継ぎ、課題を進めていった。3回目の動作法の終わりには「明日からは一つ一つフォームを整えていこうね」というと、威勢よく「明日からキャンプインだ」と言った。それからトレーニーの表情は明るくなり、イメージを用いたことでトレーニーの活動は大きく変わっていった。2日目のミーティングでは、イメージを用いたことで起こったトレーニーの

変化について話し合い、トレーニーのイメージと動作課題との関連について助言を行った。

(3) 3日目

1回目の動作法は、「キャンプインだ」というトレーニーの掛け声とともに始まった。昨日とはうって変わって、リラクセーション課題の躯幹のひねりや背反らせなどでもトレーナーが「ここ（緊張部位）が弛んだら、きつといいバッチングができるよ」というのに対して「よーし」とトレーニー自身が主体的に身体に対して働きかける様子が見られた。また膝立ちや片足立ちでは、動きの「フォーム」をイメージさせることで、より明確に動作・動きの意識化を行う様子が窺われた。しかし、トレーナーがトレーニーのイメージをあまりにも尊重しすぎると、そのイメージに巻き込まれてしまい、トレーナーがトレーニーに触れることができないような役割（アナウンサーなど）になってしまう様子が窺われた。トレーニーは自分の世界観を動作法中に持ち込み、「〇〇先生（トレーナー）はインタビューする人で、〇〇先生（スーパーヴァイザー）はトレーナー（選手のケアなどを行う役）ね」というように役割が設定されることもあった。このことによって、トレーナーとトレーニーに距離感が生まれ、それ以降スーパーヴァイザーは直接動作の援助を行うことができるものの、トレーナーは客観的に見て言語的に促す役割になった。スーパーヴァイザーはこのような状況を踏まえて、トレーニーに直接援助を行った後、自分の役割をトレーナーに引き継ぐことで、その状況は少し改善が見られた。またトレーナーは、トレーニーが主体的に動作課題に取り組み始めたことへ注意が向いており、トレーナーとトレーニーとの距離感についてはあまり意識していないようであった。3日目のミーティングでは、トレーナーとトレーニーの関係がトレーニーのイメージの中で象徴的に表れていたように感じられたため、トレーナーにはトレーニーのイメージの中でどうやったら動作課題に取り組むことができるのかを考えてもらうように助言した。

(4) 4日目

トレーニーのモチベーションは高く、1回目の動作法の時間にトレーナーが今回のキャンプの目標を聞いたところ「足のバランス」と答えた。トレーナーも動作課題とトレーニーのイメージの折り合いを意識して、トレーニーのイメージを踏襲しつつ、動作課題を組み込みながら取り組む様子が見られた。そこでは、「フォームの確認」ということで、坐位・膝立ちでの姿勢・動きの確認、そして片膝立ちと片足立ちというながれにつなげるように課題を組み立てていた。坐位においては、「よりきれいなフォームをめざそう」と声掛けを行い、細かい動作や動きへの意識づけを行いながら取り組むと、トレーニー自身身体への意識を高めて取り組む様子が見られた。さらに、課題性の高い膝立ち・立位の課題においては、実際の投げるフォームを用いりながら、軸足での踏みしめ、出し足への重心移行に取り組む様子が見られた。その後、実際に確認した動きを一連の動きの中で確認し、動作や動きの変化をトレーニーの実感へとつなげていった。しかし、まだトレーナーがトレーニーの世界観を尊重しすぎるがあまり、トレーニーに課題の流れをゆだねてしまうところが見受けられ、そのためトレーニーに流されてしまうような場面も見られた。4日目のミーティングでは、トレーナーの特徴を説明し、あくまでも動作法場面においてはトレーナーの意識としては動作課題を主として行う意識を持つことを助言した。

(5) 5日目

この日はトレーニーなりにより明確な目的をもって取り組む様子が見られた。トレーナーはさらに工夫を加え、「リプレイ」や「スローモーション」というより動きや動作のコントロール性の求められる課題を取り入れ、動作や動きの確認だけでなく、意識してコントロールすることに取り組んでいた。トレーニーもモチベーションが高く保たれているため、難しい課題においても、意欲的に取り組む様子が見られていた。他にも、「逆再生」や「巻き戻し」というバリエーションを用いりながら、難しい課題の場面では前後の動作を繰り返しながら緻密に確認・援助を行っていった。また、トレーナーも前日に比べて、トレーニーのイメージの世界との距離感を適切に図りながら取り組んでいる様子が見られ、程よい距離感の中で動作課題を行うことができていた。5日目のミーティングでは、これまでの課題間の関連性やトレーニーのモチベーションを維持するために行った

トレーナーの工夫などを整理することについて助言を行った。

(6) 6日目

最終日にはトレーニーは自分のフォームのどこが悪いのかを何回も繰り返しトレーナーと確認しながら細かい修正を行い、キャンプ長やマネージャーに自ら投げ方の助言を求めるなど積極性に色々な人と意欲的に関わろうとする一面が見られた。その結果、肩甲骨や背中周りの慢性緊張は緩和し、自体操作について意識的に動作を行い、難しい動作についてもトレーナーの援助を受けながらも、適切な動作を行うことができるようになった。また、トレーナーとの関係についても、一緒に課題に向き合うパートナーとして認めることができ、キャンプに参加している人たちに対して積極的に関わることができるようになった。トレーナーについても、トレーニーの世界観と程よい距離感を保つことができるようになり、相互的に関係性の深まりが見られた。

IV. 考察

(1) 動作課題を行う際の援助の視点

関係性形成段階には、両者ともに不安や緊張が伴っている様子が窺われた。このような援助場面では、援助者側から被援助者側に寄り添いながら働きかけを行い、被援助者についての理解を深めつつ、援助の工夫がなされていく。しかし、動作法のように援助者側の援助技術が求められる場合、援助者は援助技術を適切に行うことに意識が強く向いてしまい、本来なされるべきトレーニーがトレーナーから受け入れられる「被受容感」が薄れ、被援助者は動作課題を主体的に取り組むことが難しい状況が起こる。本事例でも、トレーナーはトレーニーに動作課題を行うことに強く意識が向いていたため、課題には応じてくれるものの、トレーナーの問いに対しては適切に応答することが難しく、トレーナーもトレーニーと一緒に課題を行っている印象を抱きにくい様子が窺われた。

針塚（2002）はFig.1の表をもって動作法のプロセスを説明している。つまり、他者対峙的活動において、重要なことは動作課題をトレーナーが提示してトレーニーがその動作課題をどのように受け入れるのか、またその時トレーニーがどのような体験がしているのかなどトレーニーの状況をよりの確に把握し、援助を微調整していくことが求められる。これはトレーニーがトレーナーにもたらす「受容感」からトレーナーからの「被受容感」につながり、さらにトレーナーとの間に「一体感」が生まれていく。動作課題を適切に行う技術を持ち合わせることも大切ではあるが、それよりも的確にトレーニーの体験を把握することが大切であると考えられる。

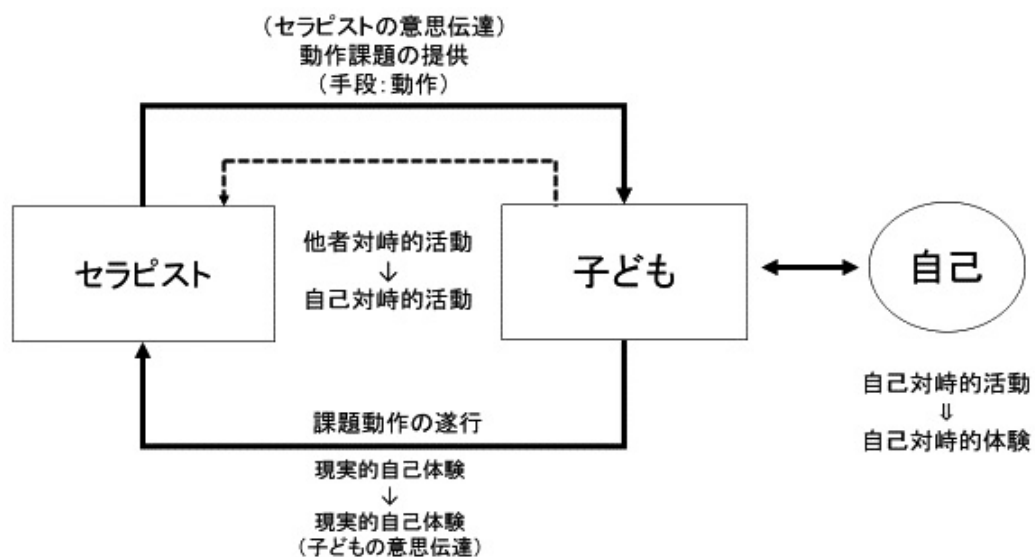


Fig.1 動作法のプロセス(針塚, 2002)

(2) イメージの導入における効果と課題

本事例では、2日目にトレーニーから出てきたイメージを課題場面に用いて、動作法を展開していった。トレーニーのもつイメージを課題場面に導入したことで、トレーニーの動作課題への意識は高まり、他者対峙的活動や自己対峙的活動はより活性化していき、目的意識をもって主体的に動作課題に取り組むことができるようになっていった。最終日には、トレーニーが主体的に自らの課題に向き合おうとする様子が見られたとともに、トレーナーとの関係性においても大きな進展が見られた。

今回の事例のように、ダウン症児のような知的な遅れが伴う障害を抱えている場合や年少のトレーニーの場合、動作法場面に明確な目的意識をもって取り組むことが難しい場合が多く、援助者の創意工夫が求められることが多い。そこで、ある種のイメージを課題場面に用いることで、トレーニーの目的意識は明確になり、主体的に動作課題に取り組むことにつながり、援助者とトレーニーは共通課題化を図りながら課題に向き合うことで行うことで、それらに伴う体験内容も豊かになると考えられる。

一方で、イメージを課題場面に導入する際の留意点も窺われた。それは、トレーニーの世界観に没入しすぎてしまうことである。トレーニーは自らの世界観の中で体験を深めていく。それは、その世界観を深め広げることにつながり、本来目的とすべき内容を見失ってしまうことにつながっていく。つまり、動作法においては動作課題を通して、トレーニーに必要な体験を可能にしているのであり、動作課題を行うことが主となる。しかし、イメージの世界が主になってしまうと、援助者はトレーニーが体験すべき体験が提供できなくなり、動作法を行うことが困難になってしまう。また、イメージの世界が主になることで課題場面のコントロールはトレーニーに移ってしまい、援助者が課題場面をコントロールすることが難しくなる。本事例においても、3日目にトレーナーがトレーニーの世界観に入り込み過ぎて、動作課題すら行えないような状況に陥ってしまった。このように、動作課題を主として行うことは、課題場面をコントロールすることにつながり、そのことでトレーニーにとって必要な体験が提供できるのであり、援助者はそのことを明確に意識しておく必要があると考えられる。

V. 今後の展望

本研究では、ダウン症児に対する動作法の援助を通して、イメージの導入の効果と課題について検討を行った。今回の事例のように、知的に遅れがあるもしくは年少のトレーニーの場合、イメージや遊びを用いることで、他者対峙的活動や自己対峙的活動が活性化し、トレーナーとの共通課題化が図りやすくなることが窺われた。その一方で、トレーニーのイメージの世界や遊びに没入しすぎると、課題場面の統制が取れなくなり、動作課題が行えないというリスクがあることも窺われた。今後はイメージを用いることで動作課題のみで体験される内容とイメージを用いた動作課題で体験される内容の相違について、さらなる検討がなされていくことが求められる。

謝辞

本事例をまとめるにあたり、快くご承諾いただいたトレーニーとその保護者、トレーナーには深く感謝申し上げます。また、このような機会を頂きました長崎県肢体不自由児者父母の会連合会の皆様に深く感謝申し上げます。

参考引用文献

安藤忠(1990) ダウン症児の発達医学. 医歯薬出版

針塚進(2002) 障害児指導における動作法の意義 成瀬悟策(編) 障害動作法 学苑社 pp.1-15

橋本創一・菅野敦・細川かおり・小島道生・菅野和恵・池田由紀江(1999) ダウン症乳幼児の手指運動操作の発達に関する研究—「つまむ」「入れる」「積む」「はめる」行為の獲得過程と精神発達、言語獲得との関連性について— 東京学芸大学特殊教育研究施設年報、43-50

池田由紀江（1980）ダウン症乳幼児の運動発達―Bayley Scale of Infant Development による検討―. 発達障害研究、1（4）、289-295

菊池哲平・田中新正（2000）集団行動に困難さを持つダウン症児に対する動作法の効果. リハビリテーション心理学研究、28、13-20.

田中新正（2002）動作法から見たダウン症 成瀬悟策（編）障害動作法 学苑社 pp.109-120

長崎短期大学研究倫理委員会承認【第 1805 号】